第13回　（仮称）新武蔵野クリーンセンター施設まちづくり検討委員会

議事要録

■　日　時	平成21年４月28日（火）18：30～21：38
■　場　所	クリーンセンター３階　見学者ホール
■　出　席	寄本勝美委員長、田村和寿副委員長、早川峻委員、越智征夫委員、石黒愛子委員、広江詮委員、橘弘之委員、金子和雄委員、佐々木保英委員、村井寿夫委員、前川智之委員、井上良一委員、事務局（環境生活部環境政策担当部長、クリーンセンター所長他）、傍聴者８名

委員長　　：委員会で議論することがいかに幸せなことであるか。そういう気持ちを何かの形で持ち続けていきたい。

副委員長　：これだけの時間を費やして議論できることは幸せなことかもしれない。少しゆとりをもって議論していきたい。いわゆる周辺３地区で勉強会を行い、直接お話をする機会を持った。我々自身が一呼吸置いてゆとりを持ってということがあるかと思う。中間まとめを経て今後何をどうしていくか、地域のまちづくりのところもう少し突っ込んで整理していく。勉強会の報告を事務局よりお願いし、引き続き参加された方からお話を伺いたい。

１．クリーンセンター建て替え「中間のまとめ」勉強会報告

事務局　　：まず２１日にけやきコミセンで実施した。整備用地から話すべきであった、現状落ち着いており波風を立てたくないといった意見、５千人の人口増が見込まれる中で年間のごみ量を５千トン減らして計画し、３炉から２炉にする施設規模への不安、委員会が市民の代表になりうるのかといった話があった。２３日に緑町コミセン。整備用地は他の場所にすべきで、その方が関心が集まるといった意見、公害があるのではという不安、地球温暖化の観点から、排ガス中の二酸化炭素量についての意見などがあった。２７日に緑町パークタウン集会所。広報、周知の仕方の意見が多く出た。ごみ減量を前提とするのであればその広報が必要、ごみチャレンジ700ｇの「700ｇ」が解りにくい、整備用地の検討は６月末までとせずより広報をして関心を集めるべき、用地がどこになるとしても現施設は解体するので、それに伴い道路整備を含めたまちづくりをして欲しいといった意見があった。

副委員長　：少し一呼吸を置いて議論をするべき。６月までに、何のために何を話すのか。多くの市民とのコミュニケーションの問題がある。出席された委員からご意見をいただければ。

委員　　：３回とも出席した。迷惑をこうむっているというより空気に近いという感想が通じて多かった。あちらこちらに分散すれば周辺の人の関心が寄せられるようになるという意見もあった。早く場所を決めて欲しい。早く決めて落ち着きたいという方も結構おられた。施設規模が小さくなることで、ごみ減量を含めて大丈夫かと心配される意見もあった。こういうまちづくりはどうかという押し付けはいらないという意見も。緑町３丁目は過去の経緯があるので厳しい意見があった。最近転居して来られた方は、本当に健康被害は無いのかという疑問を持たれていた。煙突があるというだけで不安が生じる。他のところに場所があるのなら検討して欲しい、最初からここに決め付けることは不満。匂いがあるという話もあったが、日時等記録していなければクリーンセンターの影響か分からない。チャレンジ 700ｇが分かりにくい。それなりに興味を持っていただいている方が参加している。今ある施設に不安はないという声が非常に多かったが、全市的に減量を進めなければという話が伝わっていないという宿題をもらった。身近な広報、口コミは大事。井戸端会議的なものが効果があるのではと思った。

委員　　：その他に２,３点気になったのは、元々３月までで６月まで伸びたがもっと時間をかけるべきという話があったが、しかし時間を際限無くかければいいということではなく、短いから駄目ということはないと感じた。整備用地について、中間のまとめでは、まず第一番目に敷地内東側、二番目として別の土地としているが、別の土地から考えて、どうしようもないからここという選び方にして欲しいという意見があった。広報について。周辺の方はよく認識されているが、委員会や説明会を各地でやってもそれだけでは足りないと。しかしペーパーを配っても興味がなければ捨てられてしまう。認識してもらうのにどうすればいいか。ここに建つという認識の下にまちづくりを考え、バスの巡回ルートを便利にする等、交通手段なども含めたまちづくりの意見もあった。

委員　　：土地の決定については、北町５丁目ではあまり問題視しておらず、このままにしてくれという意見があった。緑町３丁目では別の土地にした時にコストであるとかがどの程度かかるかなど、物理的なものをきっちり整理し早く明確にしろということかと思う。また、公害の問題で発病率であるとか交通事故率など数値で説明できるようにすることが、今の時代に合っていて、不安を払拭する要因になるのではと思った。パークタウンでは、広報の話があった。市から来るものだけでなく、自分達のグループで出すものに載せるなどしなければならないかと思った。日本人は行政に頼りすぎで、自分で何かをするということが欠けていると思った。ポスターや掲示板が自分の目の前にあるなど、押さえつけなければ浸透しないのでは。

委員　　：けやきは今の場所でいい。緑町は今の場所では困る。パークタウンはここでしょうがない。総体的にはここで作るのは仕方がないが、関心を持って欲しいという感じがした。まちづくりについてじっくり考えている人は少ない。グラウンドが無くなるとなんで無くなるのかというくらいで、より良くしようという我々の考えは浸透していない。環境という点ではいろいろ考えている。答申を出す時に、市役所北エリアと他地域という出し方をしているのでこれがどうなるか興味をもたれている。なぜ場所から決めないというのがあったが、どういう施設を作るかということがあって場所が決まるということと、他地域の方にも興味を持ってもらいたいという考えが、あまり分かってもらえていないと心配した。

委員　　：想像していたよりも抵抗は非常に少なかった。地域によって多少のニュアンスの違いはあるが、大体腹をくくっている。まちづくりは委員会が考えることではなく、周辺住民が考えることだというのが印象に残った。広報不足等いろいろあるが、決定的なものがなく、今後どうしたらいいかというはある。パークタウンは仮住まいという感覚で緑町３丁目とは意識に隔たりがある。迷惑施設であるということはほとんど出なかった。ということは 24 年間の運営協議会を始めとした歴史の積み重ねが良い意味で出ていると感じた。そこに全市的に参加していただくのはやるべき。

委員　　：けやきコミセンに途中から傍聴に行ったが、この委員会で検討している内容と周辺住民の想いにズレがあるのではないか。まちづくりの「まち」の定義について、市全体のことなのか、周辺のまちなのか、混同していた。

委員　　：ズレがあるなと思っていたが、当委員会の名前が施設まちづくり検討委員会で前回の建設時に、用地を決めた後、最後までやった委員会が「まちづくり委員会」で、委員長も一緒でダブっている。ここで用地も決め、まちづくりも決められるのかと思っていたのでは。今回の勉強会で、次があることを少し分かってもらえたのでは。まちづくりの話でもここでやらなくても次に色々やっていくはずで、まずは場所だろうということ。今回の委員会の位置づけを、初めにもっとしっかりすべきだったかと思った。PR 不足について。勘違いしていたのは、クリーンセンターを他に持って行ったら他の人も関心を持つと思っていたが、クリーンセンター自体が迷惑施設ではないので、他に持っていったからといって関心を持たない。ごみは自宅の前に出せば持って行ってくれるので、クリーンセンターがどこにあろうが関係ない。そうなると、人と人とをつなぐ施設、生ごみを処理してどうするなど、人がごみに関わっていく仕組みが全市的に配置されるようにする話が必要。各戸収集になり、ごみを通したコミュニケーションが無くなり、まちづくりからごみが関係なくなった。周辺まちづくりでもなく、市のまちづくりの中でごみの仕

組みを考えていくこと。道路や緑など、周辺のまちづくりについては、整備用地が決まった時点でたくさん出てくる話で、ここでそれほどやらなくて良いのかと思った。

副委員長　：今回地区単位で話を聴いたのだが、一番聴きたかったのは個人のレベルの話。不安感などは、正しいか正しくないかではない。「中間のまとめ」については概ね理解を得たと思うが、この市民参加の委員会のもう一つその外側に市民が参加する場所がある。この委員会は、これまでの経験からどうすべきかというものを出したに過ぎないということでもあり、経験からどうすべきというものを出せたともいえる。市長の決定のサポートをする委員会という誤解が随分あるが、こういうものを作っていくべきと提案する委員会。その提案は即決定に結びつく訳ではなく、これから始まる長い議論の必要な要件を揃えるためのストーリー作り。この委員会の位置付けはまだ理解されていないが、それは市民が悪いわけではなく、まだまだ語る必要がある事項が色々あると感じた。あるべきものの望ましい場所も含め、選択の要件をそろえるという原点に立った上で、さらに市民と対話していく必要がある。中身に関して大きい問題が二つあり、一つは全ての市民がシェアする問題をどうやって実現していくか。我々が先回りしてきちんと方向を出していかねばならない。もう一つは、武蔵野市のごみ問題をどう考えていくか。これは中間のまとめでは焼却場に対して付随条件的に書いているが、一般廃棄物（ごみ）処理基本計画とのつながりをどう見るかというものを具体的に考えて先に出していく必要があると思う。ごみとコミュニティーの問題など。また、施設基本構想というのが出ているが、中途半端な位置づけにある。当委員会が、施設基本構想でこの場所であるとある程度決まったものを、追認していくものであるような誤解があるのでは。ごみ処理基本計画と施設基本構想がなんだったのか説明していく必要がある。市民参加という意味で、色々な意見があった中でそれをきちんと捉えて、自分たちの位置づけを必要とあらば変えていく必要もある。市民参加が作っていく編集をきちんとしていく必要がある。委員会が出す考え方がどういう風に扱われるかをチェックしていく必要がある。我々がこの段階で何を目的にやっているか、はっきりしていないところがある。これをもう一度議論し、編集しなおしていく必要がある。この 3 回の勉強会は触発的であったと思う。今後６月に向けてどう進めていくか、提案があれば。

委員　　：無いなら無いではっきりすべき。現用地は「次善の用地」だが、状況が変わっているのか変わっていないのか、他の場所で本気で考える場所があるのか、ここからは言わなければいけない。ごまかしているように聞こえるので、それをはっきりさせるということが一つある。同時にごみ処理の方向性として、

ごみ焼却場を作るならそれは色々な法律などでこういう風に作るというのがあるのだが、プラント以外の部分でも非焼却には公園の中で出来る設備から、家庭でやれるようなものもあり、地域に持っていくことも考えられる。その辺を整理し、プラントを持っていく土地はなくても、これくらいなら出来るのではという提案をして、地域に興味を持たせる方向のベースにする。遊ぶ場所でエコはキーワード。若い人も多く集まる。環境でごみを考える、オーガニックな生活などは繋がっている話だが、焼却場となったときに失速する。それは、関係が見えていないから。子供が意識を持ってごみをどうするか考えるような方向から行かないと動かない。地域に焼却施設を考えるという意味では脱線してくるかもしれないが、そこをやらないと興味が生まれない。

副委員長　：付随条件が必要。ごみ哲学のようなものを前面に書いても良いと思う。

委員　　：消費生活センターで「節約主婦の簡単エコ家事術」という講座を受けた。小さい子供連れの若い奥さんがたくさん参加しており、節約するということはみみっちいことではないという話を楽しくされる。みんな一生懸命聞いておられて、その中でクリーンセンターを建てるのにごみを減らさなければいけないという話をしたが、ひどくびっくりされておられた。「ごみ」というと難しい話になるが、食材を無駄にしないなど生活に密着した、減らすことが楽しくなる、そういうようなことが必要。消費生活センターも環境生活部のはずだが、そういう PR をごみ総合対策課やクリーンセンターもタイアップして、楽しい方法のものも提言する必要があるという気がした。関心を持たないのは楽しくないから。市役所の中でも横断的に考えて、市民一人ひとりが何をすればいいのかということも最終的な提言には入れたほうがいい。

副委員長　：クリーンセンターそのものはハードな話だが、それを考えて行く我々は市民の立場として、一呼吸置いてもっとおおらかに考えていい。そのあたりも含めて６月までにどうやっていくのか。

委員　　：中間報告を出してパブコメを受けて修正していくのが６月までの予定と思っている。パブコメは今出しているが、勉強会は最初の頃から各地でずっと続けている。今回の３回分は周辺地域で重みのある発言が多かったので重要視する必要があるが、パブコメの回答期限後、全市民の意見を取り入れてまとめていくべきである。通常の行政でごみ処理施設を作る場合は、上位計画があって、そのあと施設の基本計画ができると考えている。そういう流れで見直してみると、基本構想はひどいものになっていて、まとまっていない。検討事項を挙げているだけである。また、用地は市民参加で決定していくと書いる。市民が用地を決定できるものではない。全てこの委員会に先送りしている。この委員会では基本構想で検討していなかったことを検討して、ある程度結論づけ、施設のイメージが固めたのが成果と思う。従って、基本構想

の見直しを行ったという形。これは今回の委員会の検討に入る前段階の条件を整理したもので、資料に補足して入れたい。都市計画や環境基本計画の方向付けと併せて前段に入れていきたい。用地についてはどう決めていくかという方向も引き続き検討し、ようやく見えてきた。周辺ゾーンか他地域という考えになったもので、その経緯をもう少し説明していきたい。武蔵野市の都市計画・環境基本計画の中で、ごみ処理の扱いが環境都市を目指す中でどれほど重要か、メインになる清掃工場がどれくらいのスペースになり、周辺の環境がどういうものか、それが市の中でどの辺にあったらいいのかを市の保有するスペースから考えて、どの辺りになるのではという書き方をしてはどうか。

副委員長　：広報部会というのをもう一つ展開していく必要がある。

委員　　：何かよくわからなくなってきた。一般廃棄物処理基本計画を作る時にも期間内に策定するということで、ごみ減量については減量協議会に任せる形になった。ごみ減量の方法を突っ込んでいく必要など、皆さんの言われることはわかるが、６月までに答申を出さなければならないということなので、期間との兼ね合いがある。市長に「中間のまとめ」を提出したときに、どの程度まで欲しいという話があった。どこまでやるかという目標を設定する必要がある。まちづくりはやらないならやらないで決めて、30 年後を見越したクリーンセンターを建設するにあたって、基本構想はある程度ベースにして、地域の声やパブリックコメントを踏まえながらまとめていく。目標値を決めないと、話が広がりすぎていく。

副委員長　：素材は全部出ていると思うが、市民参加の編集のポリシーを考え、今までの資料を編集しなおして行く必要があると思っている。時間が足らないということはない。基本構想は、相当無理なことを人に任せていて、さらに何も決まっていないことを否定した上で、市民参加に委ねた形を取っている無理がある構想。我々がそれに沿う必要はない。しかし、約束事としての時間や検討項目はある。

委員　　：昨日の勉強会で言われていたことだが、市報を読まれていない。市報に出したから PR したとは言えない。色々な所が発行している、読んでもらえるあらゆるものに原稿を送るなどしても良いのではないだろうか。

委員　　：基本構想自体がほとんど市民に行き渡っていなかった。また、基本構想に則ってといわれるが、則るようなものになっていなかった。今回、前段に入れる見直し版をさらに広めることは必要と思う。

委員　　：基本構想について。運営協議会土地を探して欲しいと言われ、現施設敷地内につくることの了解が欲しいと言われたが、９人で考えるのは酷だという返事をした。かつて議論の末にこの地に建設され、東側が建て替え用地として

考えられているかもしれないが、24 年経てば住民も忘れている。新しい市民が過去の状況を知らない中で建て替えるのではなく、自分のごみの問題として考えてもらう意味でも、もう一度市民参加でやり直してくれということにした。そういう経緯もあり、内容もメニュー方式として、市民参加の委員会が議論をして決めていくよう投げかける形になっている。責任は、当然行政が持つべきであるが、運営協議会がこのような形にしてくれと依頼をした。

副委員長　：どこまで、どういう性格の提案をすべきであるかがはっきりしていない。

委員　　：基本構想はここに決まるだろうという前提で書かれている感じがする。これを見ながらも、我々は我々のやり方で用地を先に決めるのではなくやってきた。中間のまとめは我々の責任で出している。それに対して３回の勉強会をやってきた。有料化で戸別になったがその時は反対した。というのも武蔵野市には自治会などのコミュニケーションをとる場所がない。あるのは集団回収くらい。隣近所とはごみの停留所でコミュニケーションを取っていた。そういいながらも我々も手助けをし、戸別回収を行って街もきれいになった。そういうことを踏まえたうえで検討をしていると思っているが、あとは場所をどこにするのか。ここですよとポンと出すと、やはり他が興味を持たなくなるという問題がある。他でやるならコストがどれくらいかかるなど、何か検討を加えて答申していくのが責務かと考えている。

副委員長　：我々はともかくもう一つコミュニケーションを広げる努力はしなければならない。どこにするのか、どういう施設にするのかだけではなく、我々が感じたものを提言として出す必要がある。

委員長　　：不利な状況を有利に変えるという逆転の発想の話をしたが、日の出町では、迷惑をかける代わりに 75 歳以上の後期高齢者の医療費をただにする、健康診断を実施するということがある。持ち込まれる側は被害者というだけではないということ。住民参加で出席が少ないのは一向に構わないと思っている。自分の価値を無断で損なわれるようなことがあれば、放っておいても来る。不満があれば向こうから来る。徹底的に資料を提供して信用を構築すればいい。今もやっているかは不明だが、仙台では各ステーションで申し込みをしてもらい、申し込みがなければ収集をしない。反住民的なことだと思ったが、実は住民自身がこの制度をやめないでくれといっている。年１回でもごみについて近所同士で話し合う機会が出来る。また、きれいな作文で思い切ったことがなされるということはない。市長は親衛隊を作る必要がある。自分で何かしようと思ったら市民のグループに相談する。市民参加は１％でいい。１％でこういうことをしようとすると、市民団体が引っ張っていってくれる。大勢の参加も大事だが、それを引っ張って行ってくれるリーダー的な市民グループを作ることが大事。沼津市が昭和 49 年に、日本で最初に、世界で初め

てといってもいい資源の分別収集を始めた。それが出来たのはまったく別の問題だった。ごみを処分場に持っていくときに住民がピケを張った。市の職員は、それを清掃に対する差別だと思った。しかし、これまで自分たちはごみの中で良いものを自分たちのものにしていた。これでは、差別されて仕方がないと思い、運動を行う職員が職場改革を行う中で、これまでこっそり売って収入にしていたのを止めよう、リサイクルを行おうということになった。これまで何かきっかけがあったときに一人の問題として捉えずにみんなの問題として解決する。委員会が終わってからが大事だと思う。

副委員長　：まちづくりは地元に任せろという意見もあったが、大筋は出していく必要があると考えている。今後どういう形でまとめていくかということについて、事務局の方と一度議論していくということで任せてもらって良いか。

事務局　　：本日いただいた話には色々なキーワードがあり、ご意見は至急整理する。

副委員長　：現実的な問題もあるが、ここで議論している話はもっと大きな提起もある。市長が委員会の提言を受けて、何を言いたいのか。行政の日程もあるが、それは変えてもいい。

委員　　：市民の一番の関心事になるかと思うが、整備用地について、１に市役所北エリア、２に他地域となっており、コストに関わらずとなっているが、今後パブコメでどう出てくるかわからないが、土地を買ったがために他は何も出来なくなるでは困る。バランスについても書いておかないと、誤解が生じる。周辺の人たちの気持ちとして、周辺三地域は 13 万人に比してわずかであり多数決では負けるが、何らかの形で付記するところ。こういう条件であればというところが汲まれるように配慮してまとめていく必要がある。１のところに「但し域内の土地利用を全面的に見直す」としており、そのあたりをどうやって担保出来るか。周辺住民の気持ちを共有してもらえる配慮。集団回収団体 156 団体であるとかクリーンむさしのを推進する会が 900 名程度で、委員長のおっしゃった１％に相当する。ごみに関心があり、現実に活動している人の力は重要。自分たち自身が、まだ分かっていない人たちに話す。私たち自身の問題として捉えていくことが重要。

副委員長　：前半の話は、まとめていく前に必ず必要。選択肢の書き方、どういう解釈をしてこういう意見が出たなどはまとめる必要がある。用地の問題をどういう次元で扱えば良いのかが分からない。逆にいうと、市長の諮問を受けた市民委員会としては、市長がどういう形で考えているかにも関わってくる。中身としては、少数意見であっても入れていくべきだと思う。

委員　　：土地の選定について、１番２番とあるが、順番としては２番を前にして、全市的に他の土地も探して消去法で並べていって、コストや道路付けなどで消去法を行っていく方が、地元への説得力はあると思う。

委員長　　：市民総参加とか総ぐるみという表現は好きでない。強要されている感じがする。数の多さはあまり気にしないで良いと思う。岐阜の多治見市で名古屋のごみを全て受け入れていたが、自分のごみも埋めていた。しかし処分場が使えなくなり、有料制を採用した。料金を３倍に上げた。ステーションを半分に減らした。分別の品目を 24 品目に増やした。住民からしたら困ったものだが、アンケート調査をしてみると一番評価される行政の 94%が清掃課になった。市役所の職員全てがステーションの持ち場を持っており、月１回声かけをしていた。大変であることが市民は市政に参加していることが実感でき、有用感を与え、評価に繋がった。やる気があって、行動すれば市民はついてくる。RDF（ごみ固形燃料）もやっていた。可能性を信じてやっていきたい。スーパーマーケットやまとの生ごみも面白い。

委員　　：非常事態に追い込まれるとみんな知恵も結集するが、満ち足りている武蔵野市では難しい。目黒区の駒場公園で生ごみの取り組みを見たが、家に生ごみの一時発酵の準備をする道具を持って帰り、それで用意した生ごみを「りぼんちゃん」という機械で一時発酵させ、堆肥にして公園内で使うなど、そこでのサイクルが出来ていた。武蔵野市が得意としている、花作りや緑の活動など自然を豊かにするといったところで、環境改善のグループとのつなぎのところをどうやるか。

委員長　　：公園の一角を提供してジャガイモを作ったりしている。法律では禁じられているが、市民の運動により、無理やりやっている。

委員　　：クリーンむさしのを推進する会で同じようなことをしている。コンテナに落ち葉を入れ、骨等をのぞいた生ごみを入れ、米ぬかを少し混ぜる。３,４日で生ごみはほとんどなくなる。生ごみは水分が多いため、１年くらいたっても土はほとんど増えない。コンテナを買って PR をして、去年の後半くらいから 100 戸くらいでやっている。これをどうやって堆肥にするかが課題。まだ生きているのですぐには堆肥にならない。コンポスターと違いあまり虫が沸かないし、発酵するとき熱を持つなどして、なかなか面白い。

副委員長　：今のような話が議論している人の頭にあると、かなり変わってくる。最終的なまとめをどうのようにしていくか、次回していきたいと思う。この後のコミセン勉強会はどのようになっているか。

事務局　　：５月 21 日の６時半から西武コミセン,６月５日の６時半から本宿コミセンで、勉強会を予定している。

副委員長　：我々の話を全市民とシェアしていけるようにしていきたい。

２．新施設の整備用地及び周辺の地域のまちづくり

事務局より資料の説明

委員　　：最後のページのイメージは、けやきコミセンの地域で話した中で出てきた。100 年先焼却が続くのはいやだという意見もあり、答えをもとめて二つの方向をだしている。焼却施設の寿命がボイラーと建物とで違うというギャップをどうするか。30 年毎に更新を行うとした場合の動き出しとしては、エコセメント事業の最後を目指した終末処理の検討、広域化に向けた動き、小規模化・非焼却などの選択肢を同時にスタートさせなくてはいけない。これからどうなるかわからないが、希望としては、ごみ処理施設は多様化していく、あるいは小規模化していく中で、それを賄っている地域は環境も良くなっていくイメージがある。境公園については、多摩川浄水が千川浄水と分岐するところであり、今現実に市街地であり農地もあり公園化されるようには思えない。将来的にどういう活用をしていくかは考えていかねばならない。

委員　　：都市マスタープランの改定にあたってやってみてもいいのでは。

委員　　：道路計画なども計画が立てられると否応なしになる。ダミーではなくて検討してみる必要がある。

委員　　：用地選定方法の検討に入ったわけであり、その新たな候補になるスペースが見えたのであるから、残りの限られた期間で、これを検討する必要がある。

委員　　：総合公園は都決定。平成 19 年から見直しをしており、都市計画上位置づけているが、予算などから遂行できていないものがある。当市の一人当たりの緑は少なく、公園としては作りたい。しかしお金がかかる。クリーンセンターを公園的に整備するという意味では検討するのはかまわないが、財政的な問題も考える必要がある。下水の再整備等も必要なタイミングであり、財政計画と見合わせた中で考えていかねばならない。

副委員長　：これをどうするかは我々が言える話ではなく、決める時に今の話を言えるかどうか。

委員　　：運動施設を悪く言い過ぎており、このまま出していくのはまずいのでは。検討資料なら良い。

委員　　：都市マスタープランの図の中で大きな３つの丸で囲んだ地域はどういう位置づけか。どの程度関連付ける必要があるか。緑豊かなゾーンの中にしか、公園が隣接した清掃工場は造れないのであろうか。

事務局　　：改定作業においてマスタープランで境公園に緑と共存した清掃工場の設置の位置づけをしなくてはならない。

委員　　：境公園の所有は誰か。決定は都であるが、民有地で人が住んでいる。

副委員長　：今日の問題として今後どうしていくか。武蔵野の中で代替地を探すというのは、非常に難しいことであるが、きちんと話さなくてはならないことである。

事務局　　：次回の日程は、作業部会が５月 11 日の 19 時、次回委員会が５月 13 日の 18 時半、５月 21 日の 18 時半から西武コミセン勉強会、５月 26 日委員会、６月

５日の 18 時半から本宿コミセン勉強会。６月７日に「スーパーやまと」視察。

――― 了 ―――（午後９時 38 分）